

長崎はアジアに通じる港町です。とりわけその輝きを放ったのは、江戸時代に国際貿易港として機能していた頃のことでしょう。海を越えて多くの文物が長崎を通じて、我が国にもたらされる一方、日本の商品も、長崎から世界へ船で海の道を運ばれていきました。

太古の昔から海の道は存在しますが、中世以降に陶磁器貿易が盛んになるため、海の道は陶磁の道（セラミック・ロード）ともよばれています。あるいは陸上の絹の道と対比させて、海のシルクロードとよばれることもあります。現在の日本のライフラインを支えている原油が船で運ばれているように、航空機が発達した現代であっても船はなお最も重要な交通手段であり、運搬手段の一つです。特に陶磁器のように重くてかさばるものを遠くへ運ぶ手段としては、昔も今も船が選ばれています。

ヘンゼルとグレーテルを追って

私はそうした陶磁の道を主に考古学的に研究しています。「考古学的」というのは、「モノ」を通して歴史を明らかにしていくということですが、中世や近世など新しい時代になると古文書などの文献資料の情報も多く、実際には「文字」と「モノ」

が流れ着いた海岸もあれば、海底に沈んだままの遺跡もありますが、代表的な遺跡は沈没船です。沈没船はどのように運んでいったか、直接的に知ることができる資料です。タイムカプセルとも形容されるように、その時代の情報がたくさんつまっています。潜水して海底の遺跡を陸上と同じように発掘して記録を取るためには多くの困

難を伴いますが、陸上の遺跡では決して得られない情報を我々に与えてくれます。

「モノ」を読み解き、地域の文化を知る。無事に消費地に届いた肥前磁器は、使用されて壊れて、最終的には廃棄され、都市

の情報を組み合わせながら、歴史を復元していくことになりました。そして、陶磁の道を運ばれた陶磁器の中でも江戸時代に肥前地方（現在の佐賀県・長崎県の一部）で生産され、長崎から世界中へ運ばれていった肥前磁器の生産と流通を主な研究テーマにしています。

磁器は今ではありふれたものとなつていますが、近世以前は最先端の工業製品でした。十八世紀になるまではヨーロッパなど他地域では生産できなかったアジアの特産品でした。特に良質な磁器は、アジアの中でも中国や韓国、日本など限られた国や地域でのみ生産されていたものでした。

遺跡が語る陶磁器のライフヒストリー

陶磁の道を調べるフィールドを構成しているのは、窯、港、船、都市、墓などの遺跡です。いずれも陶磁器が大量に出土します。生産地である窯で焼かれ、港から港へ船で運ばれ、消費地である都市や墓に埋められるという「モノ」のライフヒストリーを明らかにしながら、陶磁の道を復元しています。

難を伴いますが、陸上の遺跡では決して得られない情報を我々に与えてくれます。

「モノ」を読み解き、地域の文化を知る

無事に消費地に届いた肥前磁器は、使用されて壊れて、最終的には廃棄され、都市

「モノ」を

拾い集め、探る

セラミックス・ロード

まず陶磁の道の出発点は磁器を生産した窯です。肥前磁器の生産地である有田や波佐見の窯跡を発掘調査しますと、大量の失敗品が発見されます。古い失敗品から順に折り重なるように堆積していますので、その土層を一枚一枚剥ぐようにして、発掘していくと、製品の生産技術や装飾の変遷が細かくわかるようになります。

窯で焼かれた肥前磁器は、国内外に運ぶために港に運ばれます。港町では一つの産地だけではなく、いろいろな産地の磁器が集まります。そして、いろいろな目的地へ向けて、そこから積み出されるわけです。そのため、港町で出土する陶磁器はとても多様です。流通ネットワークの結節点として、磁器が集散する様子を知ることができます。

さらに磁器片が発見されるのは陸上だけではなくありません。海岸や海底もまた重要なフィールドです。海の道そのものは残りませんが、多くの痕跡が海に残されています。運搬中に遭難して、沈んだ船や積み荷

や村落に埋もれていきます。地域によって磁器の需要が異なりますので、発掘された磁器片からその地域の当時の生活文化を復元していくことができます。例えばヨーロッパとアジアでは需要が全く異なります。ヨーロッパでは王宮や宮殿を色彩豊かな金襴手の大壺が飾る一方、アジアの南の島では墓に副葬品として大皿が顔に被せられています。アジアと太平洋で隔てられたメキシコやグアテマラの教会や修道院の遺跡でチョコレートカップが大量に発見される一方、インド洋周辺にはコーヒークップが大量に輸出されています。アジアの中でも国や地域によって出土する磁器が異なります。例えばベトナムでは碗と皿の組み合わせが多く、カンボジアやタイでは大碗や鉢が大半を占め、それぞれの地域の食文化を反映しています。同様にインドネシアではイスラーム圏の文化を反映して大皿が数多く発見されます。鎖国時代にあっても世界各地のそれぞれの需要に具体的に応えていたことを知ることができます。

たった一欠片の磁器片であっても時にはたどってきた道、たどろうとしていた道を知ることができます。「モノ」を追いかけて、海の道をたどっていますが、実際には「モノ」だけが移動していたわけではなく、消費地の需要を生産地に伝える情報も運ばれていました。長崎はそうした情報が満ちあふれていました。磁器片に投影された情報を読み解くことで、「モノ」として残らないものを明らかにしたいと考えています。

陶磁器が渡った遥かなる海路に憧れて 研究の旅に誘われました

Text by Nogami Takenori



野上建紀 准教授

長崎大学多文化社会学部准教授。北九州市生まれ。全沢大学文学部史学科卒業。二〇〇二年博士（文学）。有田町歴史民俗資料館文化財専門員を経て、二〇一四年より現職。専門は考古学。中近世の産業史ならびに陶磁器からみた海上交易史・文化交流史を研究。



長崎市茂木沖合の水深18メートルの海底に沈む陶磁器

世界各国で発見されている 肥前磁器

